

金曜の会

期 日 2019年11月15日

場 所 倉敷労働会館

参加者 5名 (O、AK、AR、TA、YO)

内 容

ごんぎつね授業映像(AK)

プラタナスの木解釈(AR、TA)

大地讃頌・ふるさと合唱映像(YO)

ごんぎつねでは、『その明るる日も、～出かけました。』の部分でひと勝負かける必要があります。ここを軽く扱って『それで』『こっそり中へ』と進んでも、押さえとしては弱さが残ります。やはり『その明るる日も、』の部分の『その』が指す部分はどこかともう一度前に戻ること(戸田先生は、『引き合わない』を本気で言っているのか否かを問題にされるそうです。)や『明るる』と『次の』の比較、そして『も(さえも)』と考えていくことで、よっぽどの目的があると問題化することが大切です。

プラタナスの木では(どんな教材でもそうですが)、まずは教師が違和感をもつ必要があります。何気なく読むのではなく、『何か変だ、何かおかしい』という感覚をもちながら読むことが解釈の始まりです。

大地讃頌では、指揮が子どもの声の力みにつながり、ソプラノが上ずり、アルトはのど声になっていることが分かりました。また、いつの間にか呼吸も不十分になっていました。呼吸を入れる時の教師の構えが大切です。また、教師の余裕のなさが子どもの問題につながっています。ふるさとのアカペラも、子どもの声が落ちて、重い感じがします。もう一度、指揮も指導もていねいに見直していきたいと思います。

私事ですが、昨日他校の研究授業を見に行く機会がありました。指導・助言者も含めて、誰も協議会で授業の批判をしない。子どもの事実に対して、言わない。研究ではないと思いました。私たちの会では、年齢や役職等に関係なく、子どもの事実・教材の事実・教師の事実に対して、はっきりと言っただけです。事実だけにグサッとくることもあります。幸せなことだと思います。本物は、簡単には手に入りません。文責 (YO)